2024年1月21日  川越教会

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　丸山　勉

泉のありか

［ヨハネによる福音書4章7～26節］

サマリアの女が水をくみに来た。イエスは、「水を飲ませてください」と言われた。弟子たちは食べ物を買うために町に行っていた。すると、サマリアの女は、「ユダヤ人のあなたがサマリアの女のわたしに、どうして水を飲ませてほしいと頼むのですか」と言った。ユダヤ人はサマリア人とは交際しないからである。イエスは答えて言われた。「もしあなたが、神の賜物を知っており、また、『水を飲ませてください』と言ったのがだれであるか知っていたならば、あなたの方からその人に頼み、その人はあなたに生きた水を与えたことであろう。」女は言った。「主よ、あなたはくむ物をお持ちでないし、井戸は深いのです。どこからその生きた水を手にお入れになるのですか。あなたは、わたしたちの父ヤコブよりも偉いのですか。ヤコブがこの井戸をわたしたちに与え、彼自身も、その子供や家畜も、この井戸から水を飲んだのです。」イエスは答えて言われた。「この水を飲む者はだれでもまた渇く。しかし、わたしが与える水を飲む者は決して渇かない。わたしが与える水はその人の内で泉となり、永遠の命に至る水がわき出る。」女は言った。「主よ、渇くことがないように、また、ここにくみに来なくてもいいように、その水をください。」イエスが、「行って、あなたの夫をここに呼んで来なさい」と言われると、女は答えて、「わたしには夫はいません」と言った。イエスは言われた。「『夫はいません』とは、まさにそのとおりだ。あなたには五人の夫がいたが、今連れ添っているのは夫ではない。あなたは、ありのままを言ったわけだ。」女は言った。「主よ、あなたは預言者だとお見受けします。わたしどもの先祖はこの山で礼拝しましたが、あなたがたは、礼拝すべき場所はエルサレムにあると言っています。」イエスは言われた。「婦人よ、わたしを信じなさい。あなたがたが、この山でもエルサレムでもない所で、父を礼拝する時が来る。あなたがたは知らないものを礼拝しているが、わたしたちは知っているものを礼拝している。救いはユダヤ人から来るからだ。しかし、まことの礼拝をする者たちが、霊と真理をもって父を礼拝する時が来る。今がその時である。なぜなら、父はこのように礼拝する者を求めておられるからだ。神は霊である。だから、神を礼拝する者は、霊と真理をもって礼拝しなければならない。」女が言った。「わたしは、キリストと呼ばれるメシアが来られることは知っています。その方が来られるとき、わたしたちに一切のことを知らせてくださいます。」イエスは言われた。「それは、あなたと話をしているこのわたしである。」

[1]　サマリアの女性―最初の異邦の伝道者になった人

ヨハネによる福音書4章の、サマリアの女の人とイエス様との出会いは、いつまでも人々の心に語りかける美しい物語です。皆様も何度も読んだりメッセージで聞いたことがある有名な話だと思います。私はこの物語の美しさは、今日読んで頂いたその後にある“後日談”を読むとそう感じないではいられません。このサマリアの女性は、イエス様とのやり取りの中で、言ってみれば闇の中から光の下へと出て行くことが出来たのだなということを感じます。ある人は言いました。「この女は、最初の異邦の使徒（伝道者）になった」と。

そうなんですね。イエス様を自分の救い主として信じ、信じたことによって心が生まれ変わり、それが生きた証しとなって周りの人に伝わってゆく。その「証人」とされた人が、この当時ユダヤ人たちから付き合わないとされていたサマリア人であり、しかも、そのサマリア人たちの中からも後ろ指をさされていたと思われる女の人だったというのは驚くべきことですし、それは本当に素晴らしいイエス様のわざだと思うのです。聖書はこの人が変えられた様子をこう生き生きと描いています。―4:28以下です。「女は、水がめをそこに置いたまま町に行き、人々に言った。「さあ、見に来てください。わたしが行ったことをすべて、言い当てた人がいます。もしかしたら、この方がメシアかもしれません。」人々は町を出て、イエスのもとへやって来た。」 …少し飛んで4:39以下です。「さて、その町の多くのサマリア人は、「この方が、わたしの行ったことをすべて言い当てました」と証言した女の言葉によって、イエスを信じた。 そこで、このサマリア人たちはイエスのもとにやって来て、自分たちのところにとどまるようにと頼んだ。イエスは、二日間そこに滞在された。そして、更に多くの人々が、イエスの言葉を聞いて信じた。彼らは女に言った。「わたしたちが信じるのは、もうあなたが話してくれたからではない。わたしたちは自分で聞いて、この方が本当に世の救い主であると分かったからです。」

この一人の女の人によって、周りの人々が自分のこととしてイエス様を救い主として受け入れることが起こった。「イエスは二日間そこに滞在」したとありますが、その所には、初めは人目を避けながら生きていたであろう、この、日中暑い中に井戸に水を汲みに来たこの女も人もいたに違いありませんね。つまり、この女性はもう自分を隠していないのです。何が彼女をそうさせたのでしょうか？―彼女は、その存在の内側に、4章14節でイエス様が言われたように、「永遠の命に至る水」を、そのような「泉」を与えられたからだと思います。

[2] 「命」は…

　ヨハネによる福音書は、この前の章3章ではニコデモという年を取った議員が「どうしたら新しく生まれるなどということができましょうか」とイエス様に尋ねた出来事が記されています。ニコデモは年を重ねておりましたが、このまま死を迎えたくはないというような「渇き」を持っていたのだと思います。イエス様はニコデモに語られました。「人は新たに生まれなければ神の国を見ることは出来ない」（3:3）と。ニコデモは良く分からなかったのです。当然です。生物学的に「新しい命を受ける」などということはあり得ないことなのですから。

「命」というものの定義の仕方は色々あるのだと思います。最近私が聞いて面白いなと思った定義があるのです。これはキリスト教的な意味合いとは少し違う一般的な「命」の定義なのですけれども。正確には覚えていないのですが、著名な生物学者の福岡伸一先生による定義です。―「形あるものは、どんな生物も時の経過の中で変化してゆく。外形が変わったり、失われたりする。これは必然。しかし、命というのは、その必然に抗おうとする力だ」と。例えば人間が骨折したならば骨はどうなるか。また骨同士は繋ぎ合おうとしますよね。命の力は必然に抗うのです。「命」があるということは凄いことですね。私はこのことから旧約聖書エゼキエル書にある、枯れた骨々が、神様の息によって逆に骨から筋が付き、肉が付いてくるというあの幻を思い起こしました。あ、「新しく生まれる」というのはそれだなと思いました。自分の力では「新しく生まれる」などということは不可能。けれども神様が働かれる「命」の領域というものが確かにあるのですね。

ヨハネ4章のサマリアの女性も、どんどん「命」を失って行くような方向の中にあった人だったと思います。それは彼女が、わざわざ暑い正午に井戸の所に来たということから想像できます。他人の目を避け、自分自身にバリアを張っていたのでしょう。この町の人達は、この女性のことを時々目にしては噂話のネタにし、ちょっと軽蔑するようにクスクスと笑っていたかもしれません。既に5人の男の人と一緒になっては分れることを繰り返し、そして今は6人目の男がいるようだと。「あんな女になりたくないわね」というような声をこの女性も聞いたかもしれません。そして彼女は影の女となってゆく。しかしどうしても水を汲みに行かねばなりません。それは彼女の体もそうですが、心が、魂が、乾ききった大地のようにひび割れ、そこに水を求める思いと重なっていたと思います。人は残酷にも彼女を「自業自得だ」と言うかも知れません。しかし彼女はもしかすると何度も男に騙されてきた、いいようにされてきた辛い人生を送ってきた者であったのではないかとも思うのです。彼女は疲れてしまい、このままでは「私はもうダメだ」という絶望の力に屈してしまう瀬戸際にいたのではないでしょうか。

[3] イエス様ご自身が与えられる「泉」

しかし、その「私はもうダメだ」に、命の泉を与えてくれる人がいるのです！「（主は）サマリアを通らねばならなかった」と4節にあります。これは、イエス様がこのサマリアの女との出会いを、予め心に決めていたと捉えることが出来ます。そして、イエス様自らが彼女に声をかけ、「水を飲ませて下さい」と、「渇く人」になって下さいました。驚くべきことです。イエス様は、私たちの心に乱暴には入ってこられないお方です。それどころか、私たちの現実を自ら知って下さるのです。この時、女性は「この方はどういう方なのだろう」、そう思ったでしょう。何しろユダヤ人の男がサマリア人の女に懇願することなど当時はなかったでしょう。

いつしか彼女は、イエス様との対話の中に置かれている自分を知って、心の中に呼び覚まされる思いが湧き出て来たのではないかと思います。それは、自分の中にしまい込んでいた神様への渇望の思い、神様との交わりの思い、礼拝の思いです。このサマリアの女はイエス様と「礼拝する場所」についてやり取りをしているのです。それは彼女が心の底で、神様を求めていた何よりの証しでしょう。そして、イエス様は彼女にびっくり仰天することを語られました。それは“礼拝とは場所ではないよと。わたしイエスが来たからにはそういう時代は終わったのだよ、婦人よ（と、優しい言い方です）、ただわたしを信じなさい。わたしを通して、霊と真理をもって礼拝をしなさい”と、わたしイエスはあなたを神の国の共同体の一員として招く、と言っておられるのです。彼女はこれまでは「自分は捨てられている、呪われている」と思っていたであろうそんな自分に対して、霊と真理をもって礼拝をして行きなさいと勧めておられるのです！驚いたと思います。そして、それは喜びとなって、今まで隠れながら細々と生きていた生き方から、すべてを主イエス様に委ねて、光の中に生きて行く生き方へと転換したのです！彼女は新生したのです。正にBorn Againですね。その新生、新しい「命」は、彼女の中に「泉」が与えられたということですよね。「泉」。「泉」は自分では創り出せません。そうですよね。この水は、井戸のように自分で汲むものではなく、あなたの中にその「泉」が与えられると言うのです。神様の聖霊のわざですね。クリスチャンは皆この「泉」を与えられているのです！イエス様の十字架は、神様の愛があふれる泉です。そして御言葉も日々私たちを生かし、癒し、励ます「泉」です。この「泉」があれば私たちはどんな人生の中でも、私たちに死を与えようとする力が襲って来ても「大丈夫！」と言わせて頂けるのです。「たとい死の影の谷行く時も、我恐れじ。主がわれと共にいませばなり」（詩編23:4）です。このサマリアの、名も記されていない異邦人女性、そして初の伝道者は、私たちの先輩です。イエス様に「泉」を与えられたお互いであることを感謝致します。

お祈りを捧げます。

今、礼拝者として生きることが出来ることは、あなたが私たちを見捨てず、絶えず赦しながら招いていて下さっている何よりの証しです。主ご自身が私たちの泉となって下さっていることを感謝します！主の御名によって。アーメン。